慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ギュンター•グラスの自伝 『たまねぎの皮をむきながら』： 個人的記憶の伝達メディアとしての自伝
Sub Title	Über ,,Beim Häuten der Zwiebel" von Günter Grass : Die Autobiographie als Übernehmungsmittel der persönlichen Erinnerung
Author	江面, 快晴(Ezura, Kaisei)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2007
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.24 (2007. 3) ,p.83- 103
JaLC DOI	
Abstract	Das Bekenntnis des Schriftstellers Günter Grass zu seiner Mitgliedschaft in der Waffen-SS erregte weltweite Aufmerksamkeit. In seiner Autobiographie, ,,Beim Häuten der Zwiebel" konfrontiert er uns zum ersten Mai mit seiner Mitgliedschaft in dieser kriminellen Organisation, die er immer kritisiert hat. Warum gesteht er erst jetzt seine Vergangenheit? Der Autor antwoitet, dass der Grund in seinem neuesten Werk steht. Zweideutigkeit und Ungenauigkeit kennzeichnen den Charakter der Autobiographie. Obwohl viele Kleinigkeiten noch sehr wichtig sind, enthält die Autobiographie manche sachliche Fehler, oder sogar Erfindung. Günter Scholl, ein alter Freund von Grass in der Düsseldorfer-Zeit, verleugnet die Anekdote über das Zusammenspiel mit Louis Armstrong entschieden. Die Erinnerung des Autobiographen über seine zufällige erste Feindberührung ist auch missverständlich. Nach der Nachforschung von Andreas Kottwitz, einem Spremberger Heimatgeschichtler, weichen räumliche Beschreibung der Autobiographie und Ortsnamen von der Wirklichkeit ab. Grass meint, dass er sich ohne Dokument auf keine klare Erinnerung verlassen könne. Mit Hilfe der Metaphern Zwiebel und Bernstein formuliert er seine Unsicherheit bezüglich der Erinnerungen. Im Interview von Ulrich Wickert äußert Grass, dass der Schwerpunkt seiner Autobiographie eher auf persönlichen Erinnerungen als auf Genauigkeit liegt. Die Unklarheit bei der Erinnerung wird mit der Form des ,,doppelten Ichs" von Grass gezeichnet. Die Verdoppelung des Erzählers ist aber keine Besonderheit dieser Autobiographie. Schon in der "Blechtrommel" kann man eine derartige Verdoppelung finden. Mit einigen Ausnahmen beinhalteten auch der "Blechtrommel" folgende Werke jene vielsichtige Erzählstruktur. Das Neue in der Autobiographie ist die Bewusstheit der Willkürlichkeit, der bewussten willkürlichen Darstellung. Auch wenn der Verfasser auf das Erzählen der Wirklichkeit zielt, will die Erzählung immer ,,den krummen Weg" gehen; wenn man seine eigene Vergangenheit erzählt, kann man die Erfindung nicht vermeiden, weil eine Erzählung wesentlich willkürlicher ist. Unabhängig davon, dass es sachlich sein soli, schreibt man aus seiner eigenen Perspektive. Deshalb erzählt Grass eben sein wirkliches Leben bewusst durch die zweideutige Erzählstruktur.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20070331-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ギュンター・グラスの自伝
『たまねぎの皮をむきながら』

個人的記憶の伝達メディアとしての自伝

江面快晴

1927年生まれの作家ギュンター・グラスの自伝『たまねぎの皮をむきながら』が発売されたのは、グラスが自らの武装親衛隊所属を告白した衝撃的なインタビュー『なぜ私は60年目に沈黙を破ったか』[1)]が2006年8月12日にFAZ紙上で発表された直後だった。この自伝は2006年8月17日に、当初9月のはずだった予定を早めて発売され、初版15万部が数日で完売、すぐに第二版10万部が発行されるなど、非常な話題を呼んだ。齢八十に近いノーベル賞作家ギュンター・グラスはこの自伝で初めて彼の人生をまとまった形でノンフィクションとして語り、その武装親衛隊への所属を告白したため、ドイツの国粋主義的過去とそれをひきずる現代に対する鋭い批判を続けてきた彼の評価は伝記作家ミヒャエル・ユルクスによって『モラルの審級の終焉』[2)]と評されるほどに下落することになった。グラスに対して以前と変わらぬ支持を表明する知識人たちと、それと同じほどの批判者たちの論議は激しいものになり、8月15日にデンマークで彼にインタビューしたウルリヒ・ヴィッケルトによると、その原因となった告白者グラス自身も「困惑し傷ついた」[3)]、というほどの激しいものにな

---

1) 12. Aug. Frankfurter Allgemeine Zeitung. „Warum ich nach sechzig Jahren mein Schweigen breche; Eine deutsche Jugend: Günter Grass spricht zum ersten Mal über sein Erinnerungsbuch und seine Mitgliedschaft in der Waffen-SS“

2) 14. Aug. Stuttgarter Nachrichten. „Kritik an Grass nach SS-Beichte; Ende einer moralischen Instanz“

3) 17.Aug. FAZ. “Ein Interview mit Ulrich Wickert über seine neue Literatursendung, das Gespräch mit Günter Grass und fünfzehn Jahre als Moderator der

った。

ダンツィヒ三部作を初めとして、すでに多くの自伝的な作品の中でグラスは自己とその遍歴時代について飽くことなく饒舌に語ってきた。これまで紹介されてこなかったエピソードの他に、この自伝に新しい点はあるのだろうか。『たまねぎの皮をむきながら』は何故これほどの話題を呼ぶことになったのか、またグラスの告白の真意は一体どこにあったのだろうか。

「自伝」の性質

「たまねぎの皮をむきながら」はグラスの全人生を扱った自伝ではない。1939年9月1日[4]ダンツィヒ自由市において第二次世界大戦が始まった日、ヴェスタープラッテで練習艦シュレスヴィヒ・ホルシュタインが砲撃を開始し、ポーランド郵便局を防郷団が襲撃した日をもって始まり、1958年に『ブリキの太鼓』によって47年グループの賞を受けた後パリで最初の妻アンナとダンスをするシーンをもって終わっている。この間、いくつか60年代への回顧も交えながらおおよそ時間軸に沿って、ラテン語の成績不良のため幾度か転校することになるギムナジウム時代・空軍補助兵・初年兵時代、そして空腹に苦しめられる収容所時代と戦後のデュッセルドルフとベルリンにおける遍歴時代、その終わりとしてのパリ滞在とブリキの太鼓受賞までのグラスの青少年期が描かれている。

"Tagesthemen"; Da war der Moderator machtlos" „Er ist erstaunt über das Ausmaß der Reaktion. Er ist sicherlich auch verletzt über die eine oder andere Äußerung. Ich glaube, er ist verwundert, daß gerade dieser Teil aus seinem Buch solch eine große Aufmerksamkeit bekommt, weil, das kommt dann in dem Interview auch hervor, er andere Dinge wichtiger findet."

4) あまり日付の出てこないこの自伝において珍しく正確な日付と共に記されているこの冒頭部について、作中では「子供時代の終わり」と表現されており、特別に重要な意味を持たされているものと思われる
Vgl: FAZ 12.Aug. 2006. Feuilleton „Warum ich nach sechzig Jahren mein Schweigen breche; Eine deutsche Jugend: Günter Grass spricht zum ersten Mal über sein Erinnerungsbuch und seine Mitgliedschaft in der Waffen-SS"

2002年に発表された『逆行して *Im Krebsgang*』以来4年ぶりの新作となったこの自伝では、前作でおさえがちなものとなっていた、エピソードの連続で一気に読者を引き込んで魅了していく往年の饒舌な物語りの技術が思うさま冴えわたり、語り部グラスの面目躍如たる感がある。その語りを前にして読者は、話し好きの祖父を囲む孫たちの一人になったような気持ちになる。また今回の自伝で初めて語られたエピソードも多く、その中には後の作品の登場人物のモデルとなった人物たちも見つけることができる。これら回想中の人物の中でも労働奉仕団で出会った「変人ハイニ Komischer Heini」または「ボクタチハソンナコトハシナイ Wirtunsowasnicht」とあだ名された少年については『猫と鼠』のマールケのモデルとなっており[5]、武装親衛隊所属の告白に関係してグラスも特に重視している。また、赤軍のロケット砲「スターリンのオルガン」による攻撃で両足に深刻な傷を負った恩人の伍長は、後送されていく救急車の中で17歳のグラスに向かって「おれのHänschenをしっかり握れ」[6]と命令するのだが、このエピソードはそのまま『ブリキの太鼓』においてポーランド郵便局防衛戦で負傷した門番コビュエラに移し変えられている。

> 「だから私は自分の記憶を信じるのをためらってしまう。記憶によれば彼は、答えが返ってくるまで暗い森の中で私が歌っていたあの歌の主人公と同じように、その名をハンスといい、ときには自分のことをヘンスヒェンと呼んでいたし、救急車の中で、代えのきかない身体の一部が損なわれたのではないかと心配して自分の現在の男としての状態を確認するために、私に向かって「ズボンの中のヘンスヒェンを握れ」と命令したのだった。じっさい、そこからは何もなくなってはいなかった」[7]

「ぼくたちがコビュエラを子供部屋から引きずってきてやっと廊下ま

---

5) Vgl. Grass, Günter: Beim Häuten der Zwiebel. Steidl Verlag, Göttingen. 2006. S.103
6) ebd. S.177
7) ebd. S.177

で着いたとき、この門番にはヤン・ブロンスキーに聞き取れる２，３の単語を発する力が出たのだった。「全部ついてるか？」とこの傷痍軍人は心配した。ヤンは彼のズボンの中に手を突っ込んでこの老人の足と足の間についているものをつかみ、ぎゅっと握りしめるとコビュエラにむかってうなずいてみせた。ぼくたちはみんな幸せだった」[8)]

このほかにもこの自伝では後の作品のモデルとなった現実の人々について折に触れて述べられている。また、小説以外の部分で述べられてきた過去の印象深い体験についても、新しく自伝の一部として語られている。パウル・ツェラーンとの邂逅や散逸してしまった処女作「カシューブ人たち」(S.41) についての逸話、1958 年のポーランド旅行での大叔母アンナとの再会などは、古い読者にとって耳新しいものではない。大叔母との再会についてグラスは 20 年以上前にこのように語っている。

「そして私はカシューブ人の大叔母アンナの居間兼台所に立っていた。私がパスポートを見せて初めて彼女は私を私だと信じた。「あんれ、ギンターヒェン Ginterchen でねぇか、おぉぎぐなっただなぁ」[9)]

1974 年南ドイツ新聞に「ブリキの太鼓回顧、あるいは信用ならない証人としての作者—いくつかの出来事に関するひとつの試み」のタイトルで掲載されたこの体験談は、『たまねぎの皮をむきながら』の中にほとんど

---

8) Grass, Günter: Die Blechtrommel. DTV.13.Aufl. München. 2002. S303

9) この嘆声は „Nu, Ginterchen, biss abä groß jeworden.“ と表記されており、著しい東プロイセンなまりが再現されていて臨場感がある。しかし『たまねぎの皮をむきながら』の該当箇所では “Na, Ginterchen, bist aber groß jeworden” と、より標準語にちかい発音で表記されており、方言の印象が薄らいでしまっている。また、この部分の直前には『ブリキの太鼓』に登場する「眼鏡をなくした可哀そうな」ヴィクトル・ヴェルーンのモデルと思しき郵便局防衛者の生き残りも登場し、グラスの取材に答えている。Grass, Günter :Rückblick auf die Blechtrommel — oder der Autor als fragwürdiger Zeuge — Ein Versuch in einiger Sache.: In Süddeutsche Zeitung, München, 12./13. I. 1974.AL.

変わりない形で再現されていることが発見できる。

「射殺された郵便配達夫の母にして私の大伯母、アンナの小屋の戸を入ったそこで私はあいも変わらぬ言葉で挨拶を受けたのだった。「あんれ、ギンターヒェンでねぇか、おぉぎぐなっただなぁ」そう挨拶される前に私は彼女の不信を和らげるため、求めに応じて自分のパスポートを見せねばならなかった」[10)]

このように20年を経て同じ描写が新たな形で作品に取り込まれていることからは、この「あんれ、ギンターヒェンでねぇか、おぉぎぐなっただなぁ」という大伯母アンナの嘆声がグラスの耳に残り、ずっと変わらず残っている様子がうかがえる。『ブリキの太鼓回顧』と『たまねぎの皮をむきながら』の両方において、前後でポーランド郵便局を防衛して軍法会議で射殺されたフランツ伯父、すなわち『ブリキの太鼓』におけるヤン・ブロンスキーのことが語られており、1959年の『ブリキの太鼓』以来一貫した創作のモチベーションが、ダンツィヒ／カシューブの地と、それを捨ててきたことの中にあることが見てとれる。

内容の真偽に対する疑問

『たまねぎの皮をむきながら』は自伝であり、グラス自身もはっきりとフィクションであるとは述べていない。しかし、その内容の真偽に関しては、他の小説のように派手な寓話を創出したのではないかといういくつかの疑問がよせられている。例えば50年代初め頃のいつか、彼がデュッセルドルフで彫刻を学んでいた時代、酒場付きのバンドのパーカッション担当を務めていた時に、その頃当地を訪れた「サッチモ」、ルイ・アームストロングとセッションしたと述べられている箇所がある。

「大胆に、それでいて素晴らしい慎重さをもって私たちカルテットは

---

10) Grass, Günter: Beim Häuten der Zwiebel. Steidl Verlag, Göttingen. 2006. S.18

音を合わせた。私たちはほんの短い時間だけしか、5分か6分くらいしか4人で演奏することはなかったし、—幸せが長く続くことなんてあるだろうか—、この情景がフラッシュ付きのカメラで証拠を収められることはなかったのだが、今もなおこの耳と目にとどめられている」[11)]

このセッションについてはグラスの言うとおり、彼の記憶以外の証拠は発見されていない。そしてFAZはこのエピソードについて、グラスと同じバンドのメンバーで『ブリキの太鼓』においてたまねぎ地下酒場のバンド「ライン・リバー・スリー」のメンバー、ギター弾きのショレとして第三部に登場する人物、ギュンター・ショルにインタビューを行って真偽を確かめている。

「「残念ながら真実ではありません」とショルはこのセッションの話について語っている。「しかしうまく作られた話です」こういうこともあり得たかもしれない、とショルはまんざらでもない様子で話してくれた。「これはこれで放っておけばいいんじゃないですか。誰の損にもならないし」グラスが『たまねぎの皮をむきながら』で明らかにした武装親衛隊所属という唯一の疑いない新事実とは違うというわけである。ショルは以前と変わりなくこの友人の才能に驚いている。「やはりこれはグラスの才能ですよ。素材を記憶しておいて転換し、ストーリーに当てはめることは」[12)]

唯一の証拠がグラスの記憶によるものであり、グラスと一緒にアポロ劇場で行われたルイ・アームストロングのコンサートに行ったというこの9月8日のFAZ書評欄でのショルの証言では否定されていることからも、このセッションのエピソードはグラスの創作と考えてもよいだろう。さら

---

11) ebd. S.375

12) 8. Sep. Frankfurter Allgemeine Zeitung. „Hat Günter Grass wirklich mit Louis Armstrong gejazzt? Günther Scholl, der Mann am Banjo, erzählt seine Geschichte“

に、グラスが収容所時代のサイコロゲームの仲間として喚起している敬虔なカトリック信者「ヨーゼフくん Kumpel Joseph」が現在の教皇ベネディクトゥス 16 世であるとほのめかしている件についても証拠は発見されておらず、教皇自らもそれについて何も語っていない。[13]それゆえ証拠はグラスの記憶のみとなっており[14]、このエピソードは疑わしいものとなっている。また「濁ったたまねぎスープの中で」と題された FAZ の書評[15]では、終戦直前にグラスがいた場所についても記述の不正確さが証明されている。自伝の語るところではグラスが負傷する前にいた村の名前は「ペータラインといっただろうか？それとも別の村だったか、私たちが後でそこを通って退却していったかわいらいしい名前の村は」[16]と不正確な記憶を語っているが、ヴォルフガンク・シュナイダーによる調査では作中に述べられている位置関係と所属部隊からすると、実際にグラスがいた可能性があるのはノイペータースハイムであろうとされている。[17]

このように「たまねぎの皮をむきながら」では、描かれたエピソードの事実性について証明することにはまったく重要性がおかれていない。それどころかその正確さを守ることについては最初からほとんど断念されている。ARD のインタビュー番組「ヴィッケルツ・ビューヒャー」でグラスはヴィッケルトの感想に対して、「武装親衛隊所属に関する告白は、労働

---

13) 18. Aug. Stuttgarter Zeitung. „Nur der Vatikan will nichts sagen; Weiter Streit um Günter Grass“

14) しかもグラスはこの「ヨーゼフくん」について、「この自伝執筆中に教皇になったので、それで彼のことを思い出した」と述べており、証言をいっそう怪しいものに思わせている。18.Aug. General-Anzeiger. „Ein junger Mensch, der mir fremd ist”; INTERVIEW: Günter Grass über seine Autobiografie, in der er seine Mitgliedschaft in der Waffen-SS mitteilt, über Krieg und Jugend und seinen katholischen “Kumpel Joseph”

15) 21. Aug. Frankfurter Allgemeine Zeitung. Wolfgang Schneider „Im Dunst der Zwiebelsuppe; Die Erinnerungen von Günter Grass an den April 1945 und die Kämpfe um Spremberg: Versuch einer Rekonstruktion“

16) Grass, Günter: Beim Häuten der Zwiebel. Steidl Verlag, Göttingen. 2006. S.162

17) 18.Aug. General-Anzeiger. ebd.

奉仕団で一緒の班だった、ある少年より重要なものではない」と述べている[18]。またベルリンで催された朗読会では、司会のヴォルフガング・ヘーレスに答えてこのように語っている。

「ヘーレス：この作品は自伝というよりひとつの長編小説に思えます。
グラス：はい。私は語り部ですからね。

ヘーレス：文学化された自伝を読むというのは魅力的な読書体験ですが、批評家たちはそれを批判しています。あまりに事実に基いていなさすぎると。彼らが知りたがっているのは、あなたが正確にはどこの部隊に所属したのか、いつ戦闘に遭遇したのか、その他戦争に関する思い出などです。それらは単に記憶の問題で、思い出せないだけですか？
グラス：思い出？思い出せることはみんな、とくに重要だったのは恐怖ですが、そういったことはみな自伝の中に書きました。戦争には長い中断があって、その間というのは退屈なものでいくつかの出来事をのぞいて忘れてしまいます。それに対して緊張のほうですが、4月15日だったか16日だったかに赤軍がオーデル＝ナイセ線を越えて侵攻してからは、ある種の時間的な流れは混乱してしまい、日付を正確には思い出せません[19]」

---

18) ヴィッケルト：「ボクタチハソンナコトシナイ」とあだ名された少年が特に章のタイトルとしてえらばれていますね」グラス：これこそ私が自分で自分を非難する点で、私にとって、武装親衛隊に召集されたことより私の自伝に影響の大きいものであり、労働奉仕団にひとり、武器を持たないことについて理由を言わない少年がいたのです。私たちは呆れると同時に感心してもいた。しかし彼が武器を取らないことに対して理由を聞こうとする者などいなかったのです。彼がおそらく強制収容所に送られたと思われたその後になって初めて「彼はエホヴァの証人・聖書研究者だったに違いない」と推測する者が出てきただけでした。2006年8月17日放映 Das Erste（ＡＲＤ）の番組「Wickerts Büccher」での Ulrich Wickert によるインタビュー

19) 2006年9月4日ベルリーナー・アンサンブルで行われた朗読会で：放映

この対話から分かるとおり、グラスにとって細部の描写は依然作品の核として不可欠な存在であるが、もはやその客観性を保障する個々のデータは『たまねぎの皮をむきながら』では副次的な重要性しか持たないものとして扱われている。彼は自らが武装親衛隊に所属したという事実に対する批評家たちの反響と反発に対して「私には彼らの動機が分からない[20)]」と困惑を表明している。グラスにとって重要ではないこの告白に対して、グラスが作中で再三再四強調しているのは武装親衛隊所属の事実が重要なのではなく、社会に対する問いを立てなかったことに対する自責の念とその原因に関する考察である。この自伝におけるグラスの関心事は、従前の作品のような細部の描写とそれを支える事実関係より、少年期の自分の心性のありかたに大きく傾いている。もちろん、これまでもグラスは幾度となく自分自身について語ってきたが、それを通して自分をどう捉えたか、自分について何を考えたかについて語られることは、この自伝に至るまでそれほど多くはなかったのである。自分の周りで起こったエピソードを並べるのではなく、自らを語りとそれを通じた考察の対象とすることこそ、これまでの作品と比べた場合のこの自伝の大きな特徴であると言えるだろう。

たまねぎと琥珀

自伝のタイトルとなっているたまねぎは、既に1959年の『ブリキの太鼓』のなかで重要なモティーフとして扱われている。『ブリキの太鼓』の主人公オスカルが第三部のデュッセルドルフ時代に、バンドのメンバーと共に演奏した酒場の名前は「たまねぎ地下酒場」といい、この酒場では客にたまねぎしか出さない。この酒場で客達はたまねぎと同時にまないたを受け取り、自らたまねぎを切り、そのときあふれた涙とともに自分の悩

ZDF：司会 Wolfgang Herles. この朗読会は朗読だけではなくインタビューと交互に行われた。

20) ebd.

み・苦しみを同席の客たちに語るのである：

「まだためらいながらではあったが、たまねぎ地下酒場のお客たちはたまねぎを享受した後で自らの赤裸々な言葉に驚きつつ、居心地の悪い粗布張りの木箱の上で自分の隣人たちに打ち明け話をしたのだった」[21)]

この酒場でたまねぎを切った客たちが、涙の助けを借りて見ず知らずの同席者に個人的な過去の事柄を語る、という状況は今回の自伝でグラスが公衆に向かって自らの痛みを伴う過去を開示してみせる語りの状況とよく似ている。

「一枚目の皮の下にはなおも乾いてかさかさする二枚目の皮があるが、それをはがすとすぐに湿り気を帯びた三枚目が、その下には四枚目、五枚目が待っていてささやいている。そしてそのあとの皮はどれも長い間避けられてきた言葉をにじみださせてくるのだが、またうねうねした図案もにじんでくるのであって、それは若いうちからこそこそした人や、まだ芽が出たばかりのたまねぎが秘密を守ろうとする様と似ている」[22)]

こうしてこの語り手は自己の内部に沈潜する数々の思い出を一層ずつ引きずり出していくのだが、その中に待っているのはやはり曖昧なままの夾雑物にあふれた断片的イメージであってそれらはその乱雑さによって自らを暴露から守っており、その中から確たる真実が浮かび上がってくることはない。しかしたまねぎ地下酒場の客たちはたまねぎを切り、自伝を書くグラスのほうはたまねぎをむくという違いはあるものの、これらの行動は自分の中に秘めてきたことがらを公衆の面前で暴露してみせる助けにたまねぎを用いるという点では共通している。切り、むく作業は自己開示のため

---

21) ebd. S.693

22) Grass, Günter: Beim Häuten der Zwiebel. Steidl Verlag, Göttingen. 2006. S.9

に涙の力を借りる作業である。こうして現われてくる記憶とその告白とは必ずしも一本の線でたどれるものではなく、非体系的な寄せ集めの記憶がらせん状に形作る矛盾と撞着に満ちた曲がりくねった道であって、歴史的客観的事実に即していることはまれである。

「思い出は子供のかくれんぼが好きだ。思い出は自らの中にもぐりこむ。お世辞に傾きがちだし、しばしば苦悩のない美化を好む。思い出というものは、自分を正しいと言い張る衒学的で論争好きな記憶と矛盾する」[23)]

このような歪曲を伴う主観的思い出に対して、琥珀は事実をそのまま閉じ込めて保存している装置として登場してくる。

「思い出は質問で責めたてると、一文字一文字読みとれるものが露になるように皮をむかれたがっているたまねぎに似てくる。はっきり意味が分かることは滅多になく、しばしば鏡文字で書かれていたり、そうでなければ謎めかしてあったりする。
琥珀は、私たちが思い出して快いことより多くのことを引っ張り出してくる。琥珀はとっくに消化されて排泄されていてしかるべきものを保っている。琥珀の中にあるものはみな、柔らかく、さらには流動的な状態さえも備えている。琥珀は逃げ道を否定する。琥珀は何ものも忘れることなく、深く埋められた秘密をまるで新鮮な果物のように市場に持ってくる」[24)]

これらの歪曲に対して、従来の作品で示された二重の語り手たちが示した語りレベルの多層化は、こうして歪曲された記憶の構造を語りの構造の上に示す有効な手法であった（後述）。しかしこのような語りの構造は作者自らをその中に含むことが無かったために「たまねぎ」の中に蔵された

---

23) ebd. S.8
24) ebd. S.7

主観的記憶を直接表出する装置とはなりえていなかった。語り手と物語との密接な関係は、歴史的客観的事実を描こうという試みとは矛盾するために、物語内の語り手と作者とは、この構造のなかで直接の接続に対する試みを原理的に持ち得なかったのである。琥珀は、この矛盾に対して、歴史的客観的事実を直接に提示できる装置として登場し、たまねぎをむく語り手が迷い込んだ迷路に道しるべを与えてくれる存在として描かれている。

二重の語り手たち

語り手自らが迷いつづけることで語りを成立させていく『たまねぎの皮をむきながら』における物語の焦点は、物語内の語り手の現在ではなく、その姿を観察する現在の語り手にあわせられている。この自伝をノンフィクションとして受容する読者にとってこの形式はやや変則的にうつるが、このような語り手と、語られる対象との意図的といってよい距離のとり方はすでに前作『逆行して』で試みられている。前作『逆行して』では名前のない督促者が記録者パウルに促して物語を書かせ、パウルはその促しに応じて母ウルズラの語る体験や資料の調査を発表しているという物語構造がとられているが、これほど対象から距離をとっているというわけではないものの『たまねぎの皮をむきながら』においてもストーリーと語り手の間にはひとつの間隙が横たわっていることが断られている。

「私が、かつて13才の少年だった私であるその少年をこちらに呼んでその言葉を引用し、厳しく問い詰め、できればその特徴に無関心な他人のように彼を評価し判断しようとすると、すぐに私に見えてくるのは半ズボンと長靴下を履いていつもしかめ面をしている中くらいの背をした腕白坊主だ。彼は母の膝の上に逃げていく。彼は叫ぶ。「でも僕はただの子供だった。ただの子供の一人だったんだ…」[25)]

「このような、いつも広がっていこうとする時間の裂け目を通じて私

---

25) Grass, Günter: Beim Häuten der Zwiebel. Steidl Verlag, Göttingen. 2006. S37

は自分を、そして彼を同時に見つめるのだ。私は既に老い、彼は誰はばかることなく若い；彼は未来を見据え、私は過去を拾い上げる。私の心配事は彼のものではない；彼は恥じようとせず恥として苦しむこともないことが、彼とより親しい私にはよく調べなければならないことなのだ。二人の間には一層ごとに過ぎ去っていった時が横たわっている」[26)]

こういった一人称視点のメタレベルでの相対化は1999年の『私の一世紀 Mein Jahrhunder』にも見ることができる。20世紀の100年間の1年につきそれぞれ1人の語り手が一人称で語るこの小説の形式は、一話ごとに独立したストーリーを持っている。しかしそれはただの短編集ではなく、一人称から語られる個々の視点を集積し多層化することによって20世紀の全体像を描こうという狙いに基いたもので、冒頭にはその100人の「私」についての統合的な記述がある。

「私、私と入れ替わって現われてくる私は、毎年毎年現場に居合わせていた。いつも最前列にいたわけではなかったのは、なにせ戦争ばかりだったからで、私たちのようなものは後方に留まるほうがよかった」[27)]

しかしこのような、視点の集積を通じて物語の相対化を指向した語り手の多層化と、語り手と語られる対象とを引き離す試みはグラスにとって新しいものではなく、既に『ブリキの太鼓』において部分的な試みが始まっている。『ブリキの太鼓』冒頭部で登場し、第二部の終わりでついにオスカルの代筆をするにいたる看護人ブルーノ・ミュンスターベルクは物語の中に登場することは少ないが、オスカルの語りの時点における登場人物としては最もオスカルに近い人物でありほとんど分身のような役割さえ果たしている。第一部冒頭では：

---

26) ebd. S.51

27) Grass, Günter: Mein Jahrhundert. 3.Aufl. DTV. 20002. S.7

「ぼく、オスカルと、ぼくの看護人ブルーノのためにそれでも確認しておきたい。ぼくたちはどちらも主人公であって、全く異なった主人公ではあるが、のぞき窓の向こうの彼とこちらのぼくと、そしてドアが開いて彼が入ってきても、ぼくたち二人はその友情と孤独にもかかわらず、名前のない、主人公を持たない大衆ではないのだ」[28)]

と述べられており、ブルーノはドアののぞき窓の向こう側にいるもう一人の自分であると位置づけられている。『ブリキの太鼓』において試みられた視点の多層化は、『犬の年』では三人の執筆者集団として発展させられ、後の作品の中でもほとんどいつも複数の視点が確保されている。いくつかの例外はあるものの、この手法はグラスの創作における常套手段であると言える。しかし小説ではない『たまねぎの皮をむきながら』においては、このような多層化の焦点となるべき語り手が現実のグラス自身であるかどうかという点についてこそ議論が持たれねばならない。ふつう自伝はノンフィクションでとして受容されるが、自らの人生について一人称で語る場合、必ず語り手と作者は等しくなければならないだろう。自らが作中人物でなく、三人称を用いて語る語り手による自伝であっても、そのような焦点化ゼロの位置に立つ語り手は、やはり作者自身でなければならないはずであって、いかなる視点も許される文学作品の語りと自伝の語りは自ずと異なる。この相違は『たまねぎの皮をむきながら』の性質を考えるにあたって、内容と事実の相違より大きな重要性を持っている。なぜならグラスは「なぜ今になって武装親衛隊所属の事実を告白したのか」との問いに対して「自分の人生を語るにふさわしい形式をみつけなければならなかったが、それは最も困難なことだった」[29)]からだと答えているからである。

この形式は既存の自伝の、恣意的にならざるを得ない遠い記憶を読者に客観的事実として定着させてしまう性質に対するアンチテーゼとして提示されている。自伝において人はほとんど消え去ってしまった遠い過去を現

---

28) Grass, Günter: Die Blechtrommel. DTV.13.Aufl. München. 2002. S12

29) 12.Aug. FAZ 2006. Feuilleton

在の文脈にあわせて語りなおす。この過程で混入する錯誤と美化がグラスに自伝を書くことをためらわせてきたのだろう。このような記憶の変容を避ける道には二つの極端な方法が考えられる。ひとつは客観性に徹して自分という対象を記憶よりも資料によって描く方法、自然科学的な報告を書くように三人称の視点を築くことである。このような記述は冷静で客観的かもしれないが、自伝というよりは資料収集に似てくるだろう。グラスはこの方法をとらなかった。なぜなら彼の少年期から青年期を語るべき資料のほとんどは散逸、または少なくとも本人の手に入らないものになってしまったからだ[30]。グラスが自分を語るにはやはりもうひとつの疑わしい方法、自分の記憶を通じて自分を描くことしかなかった。この第二の道、グラスがとった方法は疑わしいものを疑わしいものとしてそのまま読者に提示することだった。60年前の記憶は、東方避難民として個人的な記録のほとんどを失ったグラスにとってもはやおぼろげなものにすぎない。確かなのは、例えば第二次世界大戦が始まった日の日付のような、わずかな一般的事実とそれに関連した記憶ぐらいである。それ以外の記憶はほとんどが今の自分が過去の自分からつきつけられた謎のようであり、あいまいで錯誤に満ちた形でしか示されない。この自伝内で多用される「私、あるいは彼」という表現は、あるいは読者のとまどいを呼ぶかもしれないが、これもグラスが自分の姿を問い詰めるべき相手、思い出せないものを思い出す依り代として示しているととらえなければならないのだ。

語りの中にとりこまれた現在

そして語り手の多層性は語り内容の時間的多層化にも必然的に結びつくことになる。グラスにとって自らの過去を語ることは常に現在を語ることでもあった。個人的な記憶と密接な結びつきを持たざるが得ないゆえに涙なしでは語れないような歴史、たまねぎの皮をむくという形で表されているこれら涙の語りは、語りとその語り手の属する語り時点との密接不可分

---

30) ebd. „Als Flüchtlingskind - ich bin mittlerweile fast achtzig und nenne mich immer noch Flüchtlingskind - hatte ich nichts.“

な関係もを示している。この姿勢は語り手の多層性と共に以前からグラスの語りの不可欠な特徴であった。物語る自分及び物語時点での現在をも物語内に取り込んでいく試みを語った言葉に、1971 年の対話における次のような言葉がある。

「私が書いた全ての著書は、常に語っている時点での今という時間を包含しています。それは『ブリキの太鼓』でも『犬の年』でも『猫と鼠』でも同じです」[31)]

過去と現在を語りの現時点の中でつないでいくというダンツィヒ三部作で始まった試みは、その関係を政治活動を通して構築していくという姿勢につながっているが、『逆行して』においては過去を描くということに疲れ、その不可能性を嘆く「ご老体」「ある人」が登場し、自分の次の世代の語り手パウル・ポクリーフケにその責を委ねてしまっている様子が語られている。

「残念ながら、と彼は言った。そのことは彼の手を離れてしまった。彼が怠慢であり、また怠慢に加えて残念なことに彼があきらめてしまったせいである。彼は包み隠さず話してしまおうとはしなかったが、ただこれだけは告白してくれた。60 年代なかばごろには過去に飽き飽きしてしまい、貪欲でいつも今、今、今と言ってくる現在に妨げられて、ちょうど良いタイミングで 200 枚くらい書くことができず･･･、今や彼にとっては手遅れだ」[32)]

現在と関係しながら、過去を自分自身のものとして書くということの困難

---

31) 1971 年 Gertrude Cepl-Kaufmann との対話 „Ein Gegner der Hegelschen Gschichtsphilosphie“ In: Gertrude Cepl-Kaufmann. Günter Grass. Eine Analyse des Gesamtwerks unter dem Aspekt von Literatur und Politik. Kornberg/Ts. 1975, S.295-305

32) Grass.Günter: Im Krebsgang. Steidl Verlag. Göttingen. 2002. S.77

さに対するこのような自覚が、これまでグラスが自伝を書くことを妨げてきたし、ドイツの過去を文学作品という形で問うてきたことの間接的な理由であろう。自らを対象として語ることは苦しみと悲しみを伴わずにはいなし、ぼやけたものにならざるを得ないということは「たまねぎ」を切ったりむいたりする際の涙、そしてその涙でぼやけた視界によって象徴的に表されているが、この涙を流している自分の姿をそのまま提示する方法を選びとったことがグラスと現実との関係を新しく構築しなおす契機となっている。

個人的な記憶の伝達手段としての自伝

このように、語り手を語りとの関係において捉えようというグラスの試みは、語りの構造の多層化と執筆時点におけるグラス自らの現在を物語の中に取り込んでいこうとする意図に現われている。2002年の『逆行して』ではグラスは語り手としての自己を物語内存在として登場させているが、ここではまだ、自らの役割を語りの督促者に限定している。『たまねぎの皮をむきながら』に至って初めてグラスは語り部としての自己を作中に置くことになった。すなわち自己を語る自己をも対象として描写することを試みたのである。ここで語られる記憶は個人的なものであり、もはや歴史的・客観的事実を追っていこうという姿勢は自己描写の中に断念されている。彼は琥珀の中に閉じ込められた史実に頼ろうとすることはあるが、それはたまねぎが何も語ってくれなくなったときに限られているのであって、個人的な記憶が沈黙したときにその語りを促す手段としてのみ捉えられている。これは『私の一世紀』などに見られる、細部に至るまでの緻密な取材と資料収集からははるかに離れた姿勢である。彼は調査すれば判明するであろう事柄であっても、自分が会敵した小さな村の名前や、「ヨーゼフくん」が実際に教皇になったのかどうか、といった事実にかかずらうことがない。

ハラルド・ヴェルツァーは『逆行して』が出版された後、個人史的・家族史的物語の商業的成功について2002年Die Zeit紙上におけるインタビューでこう述べている。

「これらの記憶は全て重要で具体的な性質のものであって、感覚を代弁しているものです。(…) 家族たちにとってはストーリーの持つ感覚的内容が重要なのです。私達が何世代か一緒に同席して話をしているときに、こういうことをいちいち細かく尋ねようという欲求は持たないでしょう。正確にはいつ・どこの話なのか、だれの話なのか、と。話題の人物は道徳的にふるまい、感じていると思われるはずですし、孫たちはそれを聞いて私たちもそのように行動しただろうかと自問することでしょう。この記憶の形式は家族を記憶共同体として強化するばかりでなく子孫の感覚的欲求[33]までも満足させるのです」[34]

ここで話題とされているのは通常の「自伝的」小説であるが、読者はしばしばこれらに含まれるフィクション要素をほとんど無視して自伝として受け入れ、みかけの確からしさの中に現実の歴史を読み取ってしまう。このようなフィクション的自伝の語りの形式は、本当の自伝の語り形式と見分けがつかなくなっているからであり、それが内容の確からしさと混同される結果に結びついてしまっているところに問題がある。グラスの自伝作者としての取り組みはこのような錯誤に対していかに現実を描くか、ということに集約される。長編小説というジャンルの物語内存在としての語り手オスカルは、作者の被造物でありながら作品世界における局外者である。彼は作品内での自由を持って語ることを許されている。しかしこの視点は、主人公達が物語内存在として自由を失った『犬の年』以降不可能なものとなり、「それ以来書くということはずっと困難なものとなった[35]」。ドイツの過去と戦後というテーマが作品の中心におかれるかぎり、作者はいかな

---

33) 家族が戦争の惨禍に加担していなかったと思いたい欲求

34) Welzer. Harald. Im Gedächtniswohnzimmer. In: Die Zeit Literaturbeilage, 25.03.2004, Nr.14

35) Grass, Günter :Rückblick auf die Blechtrommel — oder der Autor als fragwürdiger Zeuge — Ein Versuch in einiger Sache: In Süddeutsche Zeitung, München, 12./13. I. 1974.AL.

る語り手をもってしても自己と現在との関わりを免れることはできない。しかし創作におけるそのような現実との関わりはアンガージュマンを通じて得られた視点からの、自己と作品の関係構築の試みへとつながった。このことをグラスはフランツとラウールをもうけてからは、子供たちにどうやって自分のこと、ドイツで起こったことを説明していけばいいのか、という問いが一貫して創作と政治参与の動機であり続けてきたと説明し、文学的言説はすなわち政治的意見表明と同義であるとも述べている[36]。いまやグラスは自らを語る自らについて語ることを通じて自己と社会の関係を創作の中に位置づけようという試みに至った。この姿勢は従前の作品と比してすぐれて内省的なものと言うことができる。グラスが自分は現在、誰に向けて語っているのかを問うとき、『逆行して』の冒頭「なぜ、今になって？」という問いもまたグラス自身に向かって響いてくる。それに対して自ら答える自問自答の声が、これまで常に他者に向かってドイツの戦後を問い続けてきたグラスが得た、新たな問いかけとそれに対する解答の試みとしての自伝なのである。

（慶應義塾大学後期博士課程在学中）

---

36) 2006年9月4日ベルリーナー・アンサンブルで行われた朗読会で

Über "Beim Häuten der Zwiebel" von Günter Grass

Die Autobiographie als Übernehmungsmittel der persönlichen Erinnerung

EZURA, Kaisei

Das Bekenntnis des Schriftstellers Günter Grass zu seiner Mitgliedschaft in der Waffen-SS erregte weltweite Aufmerksamkeit. In seiner Autobiographie, „Beim Häuten der Zwiebel" konfrontiert er uns zum ersten Mal mit seiner Mitgliedschaft in dieser kriminellen Organisation, die er immer kritisiert hat. Warum gesteht er erst jetzt seine Vergangenheit? Der Autor antwortet, dass der Grund in seinem neuesten Werk steht.

Zweideutigkeit und Ungenauigkeit kennzeichnen den Charakter der Autobiographie. Obwohl viele Kleinigkeiten noch sehr wichtig sind, enthält die Autobiographie manche sachliche Fehler, oder sogar Erfindung. Günter Scholl, ein alter Freund von Grass in der Düsseldorfer-Zeit, verleugnet die Anekdote über das Zusammenspiel mit Louis Armstrong entschieden. Die Erinnerung des Autobiographen über seine zufällige erste Feindberührung ist auch missverständlich. Nach der Nachforschung von Andreas Kottwitz, einem Spremberger Heimatgeschichtler, weichen räumliche Beschreibung der Autobiographie und Ortsnamen von der Wirklichkeit ab. Grass meint, dass er sich ohne Dokument auf keine klare Erinnerung verlassen könne. Mit Hilfe der Metaphern Zwiebel und Bernstein formuliert er seine Unsicherheit bezüglich der Erinnerungen. Im Interview von Ulrich Wickert äußert Grass, dass der Schwerpunkt seiner Autobiographie eher auf persönlichen Erinnerungen als auf Genauigkeit liegt.

Die Unklarheit bei der Erinnerung wird mit der Form des „doppelten Ichs" von Grass gezeichnet. Die Verdoppelung des Erzählers ist aber keine Besonderheit

dieser Autobiographie. Schon in der „Blechtrommel“ kann man eine derartige Verdoppelung finden. Mit einigen Ausnahmen beinhalteten auch der „Blechtrommel“ folgende Werke jene vielsichtige Erzählstruktur. Das Neue in der Autobiographie ist die Bewusstheit der Willkürlichkeit, der bewussten willkürlichen Darstellung. Auch wenn der Verfasser auf das Erzählen der Wirklichkeit zielt, will die Erzählung immer „den krummen Weg“ gehen; wenn man seine eigene Vergangenheit erzählt, kann man die Erfindung nicht vermeiden, weil eine Erzählung wesentlich willkürlicher ist. Unabhängig davon, dass es sachlich sein soll, schreibt man aus seiner eigenen Perspektive. Deshalb erzählt Grass eben sein wirkliches Leben bewusst durch die zweideutige Erzählstruktur.